五十九期（士59期 経8期）

担当者 二世 神保 明生

満洲での四教官の壮烈な自決飛行

富岡孝利（8／3・航戦）

昭和20年北万の佳木斯飛行場に58期生の操縦訓練の第26教育飛行隊があった。8月9日ソ連の侵攻により直ちに訓練中止、第2航空軍の隷下に入り奉天北飛行場に終結対ソ作戦に参入せよとの命を受けた。8月10日、11日に一式戦闘機（隼）高練を全機奉天に集結し、高練は戦車攻撃用の夕弾を爆装し出撃態勢を整え後命を待つ。教官達は一式戦の実戦を期し意気軒昂であった。8月12日～14日は西満国境を越境してきたソ連戦車を攻撃し成果を挙げた。8月15日後の行動につき58期生の下山敏郎氏の記述によれば、

「我々の教官であった鎌田正邦大尉、西谷眞六中尉、福田滋中尉、後藤宰久中尉の四氏は終戦直後、昭和天皇の御詔勅を持って関東軍の鎮撫に飛来した竹田宮を護衛して朝鮮の京城まで送り、任務は立派に果たした。然し鎌田大尉以下四機は原隊帰還の命令はなかったにも拘らず奉天北飛行場に帰って来た。飛行場の滑走路にソ連機を見るや飛行場上空を旋回、翼を振り別れを告げて、初秋の蒼穹に見事に急上昇、そして一挙反転急降下して自爆された。しかもソ連機を避けての自爆だった。時に8月19日であった。ソ連機を爆破したならば、まだ残っている我等が如何なる悲惨な目に遭うだろうかを案じての尊い決断だったのである。鎌田さん以下、何時、どの時点で自爆決行を決意し、打ち合わせて四機一糸乱れずに行を共にされたのかと言うことである。恐らく初めから此の決意であったと思われる。チャムス（佳木斯）の飛行場で寝食を共にしてきた先輩達の行動に粛然とせざるを得ない」

58期生は8月20日満鉄鳳城駅で奉天から下ってきた59期生の翼源隊の列車に1輌連結されて釜山港に南下したのである。接続時の停車中に私は広幼の先輩の43期生の中元さんに会っている。又亡くなられた後藤宰久中尉（57期）も私の広幼の2年先輩であった。帰国後58期が命の恩人である第26教育隊長の島田安也中佐（38期）――58期帰国後数年間シベリア抑留された――を会長として『不死鳥会』が結成され、現在も毎年集まっている。